

第18回 IBD(炎症性腸疾患(潰瘍性大腸炎・クローン病))勉強会 「Dysbiosis(=腸内細菌叢の乱れ)とIBD ～糞便移植も含めた最近の話題」を開催しました!

NST(栄養サポートチーム)リーダー・内科主任医長 藤原 明子

3月26日(土)午後1時半から、国体町新病院の8階病棟のカンファレンスルームで第18回炎症性腸疾患(以下IBD)勉強会を開催し、患者さんやご家族・ご友人など8名が参加してくださいました。国体町の新病院に移転して初めての開催です。

「腸内常在菌プロファイル検索—いわば患者一人ひとりの腸内常在菌パターンを解明したもの」が、コンピューター医学の発達にともない明らかとなってきた結果、年齢、性別のみならず、居住地域や食生活習慣等で、同じ人でもそのパターンが変動していくことが判明しました。

昨年には、腸内細菌叢の乱れが消化管疾患のみならず、肥満症やアレルギー、自閉症などの多種多様な疾患とDysbiosisの関連性を特集した報道がありました。それを受けて国内での糞便移植研究の現状を知りたいと患者さんの声が高まってきたこともあり、今回のテーマとしました。

本患者会では、プロバイオテックスや腸内細菌を話題にする参加者が多い印象があり、皆さんが普段から興味を持ち、馴

染みのあるテーマなのだろうと思います。

1958年に初めて「偽膜性腸炎治療に糞便移植が有効である」と報告されて以来、この数十年間にDysbiosisがIBDの発症や病勢に影響している可能性が高いと示唆される報告が多くみられます。2014年より日本でも、近親の健常者から糞便移植を行う臨床研究が、大学病院など数か所の医療機関で行われ、有用性の検証がなされていますが、現段階では未だ糞便移植のみでは寛解に至らない例が多く、寛解維持例は限られているようです。今後の治療法の確立が大いに期待されます。

私自身も7～8年前から腸内細菌の可能性に興味をそそられ、一般書から専門書に至るまでたくさん入手しました。未解明なことが山とある分野ですから、消化器内科医としてもっと学んで今後のIBD診療、ひいては消化器科診療にどんどん活かしていきたいと考えています。

